



〈対談〉

# 『銀座周辺の 印刷界追憶』

史談会開催日

昭和 55 年 (1980 年) 12 月 15 日

■ 語る人

荒木 政吉 氏

牧治 三郎 氏

今回の史談会は、昨年 12 月 15 日に東京・新富町の日本印刷会館で行われたもので、銀座を中心とする印刷会社の移り変わりについて、80 年も銀座の地に生き抜いてきたお二人の思い出です。

荒井政吉氏は明治末年、少年時代に銀座の細川活版所に入社して 30 数年間勤続され、営業部長、常務取締役として活躍、戦後は、\_ 荒井美術を創業、業界の古老といえる方です。

牧治三郎氏は東京印刷同業組合がまだ京橋因幡町にあった大正 5 年から、組合書記として昭和 13 年まで 20 数年間勤務、印刷界の今昔に精通され、大著「京橋の印刷史」を著述し、業界の生字引と言われる耆宿です。

## (1) 12 歳で細川活版所へ

明治 20 年、印刷所には侍が多かった

荒井

私は旧称で言う京橋区八丁堀に明治 33 年に生まれました。先祖は京橋区船松町（現在の中央区湊町）です。この辺りは明暦大火の後に埋め立てられ、俗称を鉄砲洲と言われました。家は土地の草わけで徳川幕府お抱えの回船問屋・名字帯刀御免の威勢の良い家業を営んでいたとのこと。

維新の大変で、徳川幕府の崩壊とともに家業も歪み、一家は離散、そのものの貧乏暮らしの中から、私は12歳のとき銀座の細川活版所に入店しました。以来30余年間京橋の細川活版所へ勤務、戦後は京橋で「荒井美術」を営んでいます。

まず初めに細川活版所についてですが、細川活版所は明治18年4月18日に創立しました。明治18年というと、銀座通りには文明開化を先取りするような数多の業態、出版社、印刷所、新聞屋、活字屋などがズラリと並んでまして、中には人力車製造業で国内に数万台、上海に輸出をするなど、現在の自動車産業のようなものも出現しました。不動産屋もあれば建築屋や画廊もありました。明治初年から印刷業者も建ち並んでいましたが、これが組合を作るような形態となるのは、細川活版所創立の頃でした。細川活版所を創立した細川芳之助さんは、国文社で支配人をしていました。

明治20年に、初めて所得税を納める政令が出されて、秀英舎ほかズラリと並ぶその中に筆頭の納税者は細川芳之助さんでした。

当時の印刷所は侍が多く、お世辞言葉を使わず威張ってました。電話の応対などでも怒鳴り返すことも多く、一応権威を持っていて、競争などというのは言葉に出すのも汚らわしいという風潮でした。印刷所というのは文明開化の前駆として京橋で花を開き、当に銀座で花が開きました。私はそうした細川活版所に勤務したことを今でも大変誇りに思っています。

細川活版所は、柄は小さいが、商売では一つの見識を持っていた印刷所であったと、繰り返し申し上げることができます。

#### 牧

荒井さんは細川活版所で重役になられ、その後あなたが取締役となり細川さんの代理などをされたわけですが、その間のいきさつ、荒井さんが退職なされた事情等、細川活版所の歴史を話していただけますか。

#### 荒井

では大雑把にお話しします。初代社長の細川芳之助さんは実に見事な人でした。43歳で亡くなられてますが、それであそこまで作ったのですから……。日本銀行、安田銀行（富士銀行の前身）、日本鉄道など、素早く得意先を作っていました。



私が入社したときの磯村登飛知氏という支配人は、裏の真赤な羽織に山高帽をかぶって外出するという、ちょっと風変わりな人でした。その磯村支配人が大病のときお嬢さんばかりの御家庭のため、用心棒として若い私が磯村さんの家へ泊り込み、そこから夜学へ通いました。4 ヶ月ぐらいで1度回復しましたが間もなく亡くなりました。

そのあとは、創始者の1人である戸田直秀氏が、漢文の大家で専ら校正の権威者として名を知られていました。その陰で、私の大先輩にあたる牧野伊三郎さんは、随分よく働いていました。私はこのお二人には随分引立てていただき、お蔭で一人前になりました。

2代目の細川社長は事業・経営に興味が薄く、事業を一身に背負った戸田さんは、それを私にしみじみと言うわけです。ところがそうしたことが、大先輩の牧野さんからともすると誤解されることも多く、私は2人の板挟みにあって困惑したことも多々ありました。

北川武之輔君（第二次大戦後の社長）という人は私より3年遅れて入店しましたが、2年程で退社し、海軍の水兵を志願しました。海軍の任期4年を経て、さらに1年ぐらい他で働いた北川君は再び細川へ入店してきました。戸田、牧野両上役の反対がありましたが、私はむしろ北川君の舞い戻りを歓迎しました。

私は18のときに、牧野先輩が病気で倒れられたあとを継ぎ、細川の大スポンサーである安田銀行を受け持ちました。有り難いことに安田善次郎（総長）の御贔屓を受け、その他上席の人々に可愛がられていました。毎日、全部で250種類ぐらいの印刷物を倉庫に入って管理する役をしていました。銀行から電話があると「それは倉庫の右2番目の棚にあります」など私が指図しました。午前と午後は銀行の倉庫の中を見回り、当方に都合よく工場に原稿を回していました。

安田銀行は20数行の銀行の救済をしておりました。したがって、安田銀行関係の地方の銀行からのたくさんの注文があります。ですから世間が不景気である時、例えば銀行パニックが起きたあとも細川活版所は仕事が絶えず、繁栄が続きました。欧州戦の戦中・戦後を通じて細川活版所の資力はごっそり蓄えられました。

ところが大正12年に入ると、関東大震災のために地方は自力で生産を始め、地方銀行の印刷受注は全く減ってしまいました。そし



て昭和に入って起こった銀行パニックでは、東京市内の細川活版所の大事なお得意が相次いで潰れてしまいました。私は狼狽しました。先行き真っ暗なので、私は一工夫も二工夫もしました。直ちに銀行以外の会社の開拓に意を注ぎ行動を開始しました。

北川君が細川へ再入店したのは関東大震災の前年でした。北川君は独特の才能を持っており、こわれた物を修復するにはすごい気力があり、こういう場合には力を存分に発揮しました。

安田銀行は安田喜次郎総長を亡ったあと、日本銀行理事・結城豊太郎氏を迎えて安田財閥総元締の保善社の理事として銀行の大合同を計画しました。その大注文を引受けて、私は毎日保善社に詰めていました。

大正12年9月1日午前11時58分の関東大震災の当日は、株主名簿と株式台帳の原稿をカバンに、人力車で日本橋の丸善の前に差し掛かりました。そのとき、私は車から路上に放り出されました。立ち上がると、酔っばらいのように足はふらふら、道路は土煙、視界はもうもうとしています。私はとっさに線路の上に立ちました。死んだ父親から「安政大地震のときは、地面が割れてその間に人間が挟まった」と聞いていたので、ここならと線路の上に立ちました。私はいくたびも余震を感じながら、銀座裏の店へ戻りました。店は住み込みの小使が1人だけで外には誰もいません。工場へ入ろうとすると、中から戸田さんが出て来ました。そのとき私はさすが元老だと思いました。戸田さんは自宅が品川ですから打ち合わせて帰っていただき、私は家が近いのでまた戻ることにして戸田さんと別れました。堀端の警視庁（現在の第一生命ビルの地点）に火事が起こっていたようですが、銀座辺はまだ火が出ていませんでした。私は八丁堀のわが家へ帰り、2～3用を足して再び細川へ戻った時刻は4時30分頃でした。そのときは山崎洋服店（今の三越）の屋上に煙が上っていました。私はそこで「これは駄目だ」と思い、鍵の掛かっていた重要書類の戸棚を壊し、配達用の箱車に詰め込めるだけ詰めて運び出しました。火の粉を被り、皇居の方向に向かって走り出しました。時刻は7時をまわっていました。空は真赤でしたがわが家の八丁堀の方向だけは空が暗いので安心し一散に家へ突っ走った。そして母親を連れて、また二重橋へ戻りました。

翌朝、東京市庁の前の市電の終点地に置かれてあった空の車両に母親を置き、私は品川の戸田さんの住居に赴きました。座敷には牧野、北川の諸君が4～5人顔を揃えておりました。「書類は二重橋に救



出している」と言ってすぐ走らせました。私は前日から一食もってないで、そこでにぎり飯を作ってもらいほうばると、母親の分も持って直ちに東京市庁にとって返しました。

二重橋に持ち出した書類のお陰で店は急速に金の工面がつかしました。それは、お得意さんが銀行ばかりですから、請求書を持って行くとすぐ引き代えに金になるからで幸でした。

## (2) 震災後の復興に励む

### 昭和 21 年に細川去り独立

#### 荒井

震災後の復興に向かって、小数の細川の従業員は励みました。レンガ建ての残骸の処置と灰かきの作業で鉛の回収は進められました。1 か月の間、鉛の看視のため、私は小さなバラック小屋で、暗黙と無人の銀座で夜を過ごしました。

その一方で、速やかに集められた資金は仮工場の建設に役立ちました。印刷機 5 台と活字資材のすべては大阪で購入され、買い求めた巣鴨の庚申塚の空工場は 10 月の末に細川活版所として新生しました。これら一連の仕事は、印刷インキ店求林堂支配人の佐藤孝次郎氏の機敏にして犠牲的な努力によるもので、感謝しなければならぬと思います。

この間にあった一つの重大なことを申さねばなりません。9 月 5 日、私は人を介して安田保善社から呼び出しを受けました。保善社は耐火建築で焼失を免れていました。そこで総務の児島健二氏（後の四国銀行支配人）に会いますと「実は四谷の日本紙器<sub>2</sub>が焼け残った（日本紙器は安田の関係する会社）。安田銀行の印刷物はもちろん、大合同の印刷物も必要である。安田のために君は絶対必要である。入って奮闘してくれぬか」と言いました。すでに細川の職人も大分手回しがついていると付け加えられました。私はじっと考え、思わず「お断りします。私たちは復興のため必死です。残念ですが——。」と拒絶しました。戻って戸田支配人にこのことを報告すると、戸田さんはただ「ウン」と一言口にしました。戸田さんという人はいつもそういう人でした。

震災の年の翌年、私は 2 代目細川社長にお目にかかる機会を得ま

した。四谷塩町の伊勢虎で新年会が催されたときです。他の社員も私と同様にこの宴会ではじめて社長の姿を見たのです。

問題は席順でした。私は、戸田・牧野両氏の次に並んでおりましたが、その時私は変な気持ちでした。宴が閉じられて外へ出ると、私は北川君から言葉では表現いたしかねることをされました。前年に株式会社組織になったのについて、私だけが特に株式名義を与えられたことは聞いていましたが、難しいものです。そこで翌日私は戸田さんを訪れ、「これはまずいことです。私がへりくだることで済むことゆえ、今後のことを熟慮してほしい」と述べました。こうした苦々しい問題は、その後何度も起こりました。しかし、これは人の恥さらしになりますので、このくらいで省略させていただきます。

細川活版所が同族会社形態の株式会社となってしばらくして、新しい役職取決めについて戸田重役から「おまえは何をやりたいのか」と聞かれましたので、「私は営業部長を望みます。私が営業部長を務めなければ、この会社の事業はやって行けません。私の外にその適任者はいません」と答えると戸田さんは、「取締役営業部長だね」と言い返してきました。

「いや、私はとにかく営業部長を望むのです」。2、3の話し合いの末に私は取締役の営業部長として決められました。本当に困ってしまいました。いろいろと経緯がありましたが、私が取締役営業部長になったことは対外的には非常に便利でした。

それから外を歩いて驚いたのは業界の多くの猛者達の力です。それと文章堂印刷所さんでした。開拓のためにどこを訪ねても文章堂が入ってました。カタログといえば文章堂。こうしたことから、これから立って行くにはどうしても写真の印刷をやらなくてはならないと決心しました。活版機の2回転とオフセットを備えなければならぬと痛感しました。まずオフセットを入れるについての案を作り、戸田さんを説得しましたが、これにはかなり手こずりました。その後、北川君が社長となりましたが、北川君は私と考えが一致して、私の提案を喜んでよく取り上げてくれました。

ある時期に、工場のほうも私は任されたのですが、任されたということより、むしろ私が好んで口出しせざるを得ない事情が起こった、と申しましょう。それは、工場内にある不穏な行動が起こりかけ、私はそれを憂えました。この際は私の独断的采配はこれを鎮めましたが、それがかえって北川君の心に動揺を起こさせました。私は、



このことは今になって考えると、オーバーであったかなと思っています。

戦争の後期に至り、国は激しい戦時態勢の中で、指定された1人の生産責任者としての北川君、その他諸君も大変な時期でした。私は軍の命令で、第2総軍1指令部印刷局の工場設営のために広島へ赴きました。爆撃が烈しくなりました頃、私の留守の家に、書状を以って細川芳之助社長から私所有の株について問い合わせがありました。私は細川社長の真意を疑いました。私は上京して木挽町の第2工場（本社は焼失）を訪ね、北川君に会い、その内容は黙視して株を北川君に譲りました。

私は、愛する細川の存在するためには、北川君始め皆さんの努力が大変であることを痛感して、「今後も私に必要があるなら一言声をかけて下さい」と言いました。私は細川社長に対して私のこの行動はやむを得なかったと思っています。マキャベリの言葉に「決断のなき君主は多くの場合滅びる」というのがありますが、この時私はこの言葉を思い出しました。

その後、司令部の厳しい制限令下の昭和21年の末に私は敢えて独立しました。といっても工場は15坪、小屋がけ同然のものでした。

翌年の昭和22年春、その小工場に富士銀行（安田銀行から改称）の庶務部長の吉江雅三氏が訪ねて来られ、私を驚かす問題を提示しました。吉江氏は、そのときは銀行から細川活版所に重役として就任していました。勿論印刷物の受注と融資の重要な役目を担ってのことです。吉江氏と私とは若い頃からの知り合いでしたから、立場こそ逆になったとは言え、すべて気楽な気持ちで話し合いました。

吉江氏の要件は「君にもう一度細川に復帰してもらいたい」というもので、吉江氏が細川に入社して以来の内訳話を縷々と聞かされました。私は冷静でした。それに対して答えは、「33年間勤務した細川を退いて、私は今、第2の人生のスタートを切り、一家は協力していますので、折角ですが……」と柔らかく断りました。

すると第2の案が出ました。

「それでは、これは君の力を信じてのことだが、僕と2人で会社を興そうではないか。経営施策のすべてについては、銀行の後ろからの援護がある……」と言います。私はこれは重大な発言だと驚きま



した。私はそこで言葉を強めて、「我が古里」を愛する心を語り、「私は細川を敵にすることは絶対に出来ません」と拒絶しました。考えてみますと、私の心の奥にあった家付き娘の家出に当たる自分と細川のつながり、「私の細川」はこれできっぱり切れた——と思います。いろいろありましたが、私は正義こそわが命、正義こそ生き甲斐であると思っております。

時間を限られましたのでこの口述は索引を並べたに過ぎずその内容は凡て省略されました。この歯切れの悪い「語られぬ真相」は聴手の御解釈に待つこととしました。

### (3) 印刷同業組合員 567 社

#### 事務所の家賃払えず銀座を転々

荒井

この辺で銀座の話に移りましょう。

今の銀座はレジャーや服飾の町となってしまいましたが、あの頃の銀座は文明開化のお先棒でした。

牧

大正6年の銀座を見ると、当時でいう銀座には福音印刷（活版）、大塚印刷（石版）、美山堂（写凸）、栗山堂（石版・銅版）、集栄堂（活版）、三間印刷所（石版）の6工場がありました。現在の銀座の範囲で見ると、当時の西紺屋町には大日本印刷の前身である秀英舎（活版・石版・オフセット）と右田印刷所（石版）の2軒、弓町には三協印刷所（活版）、千代田印刷（活版）、金芳舎（活版）、文玉舎（活版）の4軒、宗十郎町には東京国文社（活版・石版・彫刻）と東京造画館（石版）の2軒、鎗屋町には細川活版所1軒、滝山町には東京製本、中心堂（活字）の2軒、新肴町には集栄堂（活版）、審美書院（コロタイプ、石版、木版）、明治製版所（写真製版）の3軒、八官町には忠愛社（活字）、民友社活版製造所（活字鑄造）の2軒、日吉町には民友社印刷所（活版）が1軒、山城町にも彩雲堂（石版）1軒で、結局現在でいう銀座には31工場がありました。

当時の東京印刷同業組合は、強制加入でしたが、それでも京橋に147社、神田に116、日本橋57、浅草50、芝41、本所29、下谷28、麴町23、本郷22、牛込15、小石川12、四谷9、深川8、麻布6、



赤坂4と全体で567社しかない印刷組合でした。

### 荒井

印刷所に関するこのような記録は何もありませんね。本屋のことならたくさん記録が残されていますが……。

### 牧

印刷屋の記録というのは全く何もありませんね。とにかく大正6年には、印刷組合で輪転機が8台しかありませんでした。手ざし四六全判の機械が211台、菊全が258台、フートが246台、ハンドが922台。平版ですとオフセットの四六全判が11台、菊全が1台、四六半裁が10台。オフセットの前身で今はない「アルミ版」の菊全が7台、四六全判以上が24台、とオフセットより多くありました。その他石版では四六全判が8台、菊全が25台、ハンドが922台、手まわし鑄造機291台、ライノタイプ3台で、機械総数は3,880台でした。

組合の1年間の収入予算（大正6年）が4,166円28銭でしたが、これで書記3人と集金人1人の給料を払うのですから大変です。当時、私の給料が15円ぐらいでした。その頃は印刷クラブが家賃を半分持ち、テーブルやお茶の道具などはすべて印刷クラブの寄付で賄うといった具合で組合は哀れなものでした。印刷クラブというのは懇親団体でして、今の印刷工業会とは全く異なります。それが印刷協会となり印刷協和会となりました。

印刷同業組合では機械の割で組合費を集めており、輪転機1台につき81銭6厘、ハンド1台1銭8厘、オフ機1台60銭という具合でしたが実際には小工場が多いため、組合費は2銭か3銭のところが多かったです。そんな中で、組合では印刷クラブが刊行した「印刷工芸」という機関紙を1冊10銭で買い取り、全組合員に配るなどというサービスも行いました。2～3銭の組合費で10銭の機関紙を出すのですから、随分苦勞したものです。組合費はその後、特等から15等までに工場割をする等級割となりました。

組合の始まりは、まず東京活版印刷業組合が秀英舎の中に発足、2～3年後には東京石版印刷業組合がやはり秀英舎の中に発足しました。後に石版組合は東京石版印刷同業組合とし、因幡町に事務所を借りましたが、そこへ活版の人が加わって印刷同業組合となりました。しかしその家賃が払えなくなったため南鍋町に移り、家賃の半分を印刷クラブが払うことになりました。後に組合の役員を印



刷クラブの人が独占してしまうことになり、印刷クラブでは同業会解散論を出し、役員が同業会から脱けてしまいました。そうなる組合はまた家賃が払えなくなり、南鍋町から、現在の有楽町・日劇の向かいに移ることになりました。当時そこは田中商事株式会社で、その2階の1室を借りました。ところがここでは会議を開こうにも場所がなく、秀英舎を借りる他ありません。印刷クラブとしても会議が出来ないため、大正11年、有楽館の4階に移転、この家賃はやはり印刷クラブの人が出すことになりました。ところが次は関東大震災です。今度は印刷クラブでも家賃が払えなくなり、丸ビル印刷所の地下室へ越しました。

新富町の現在の印刷会館の場所は、大正14年に1万円で買いました。というのは、現在の宝町にあたる因幡町の事務所を売った金、約7千円があったからです。この事務所は石版業者の方々が毎月積み立てて買ったもので、組合ではこの7千円に積み立てをし1万円にしました。当時ここは朝日セメントという倉庫で平屋でしたが、それを昭和6年12月、建築総費用、886円で総2階に直し、戦後今の印刷会館が出来るまで利用したわけですから、印刷同業組合は現在の組合に非常に貢献しているわけです。と同時に因幡町の手事務所を買った石版業者の方々の骨折りの結果でもあります。

ところで組合の料金表ですが、これは大正6年以前に業者は誰も作っていません。それで私が組合に入り、料金表を作るように言われたのが今から60年前でしたが、これには随分苦労しました。私は素人ですから、秀英舎の支配人の青木さんのところへ行き、「何かそのようなものがあったら教えていただきたい」と頭を下げました。この青木さんと佐久間さんという営業課長さん2人の知恵をお借りして作りました。

料金表を作る以前に上野で業者大会があり、組合は「今の料金を2割、3割上げるだけではやって行けない。何とか料金表を作る」ということでこの仕事にとりかかり、約半年で作りました。しかし、その後随分いろいろと改良しました。関東大震災のあとには業者がこれを持っていないので再版、大正15年にはほとんど料金は同じですが、1月と9月に再版し、昭和6年には印刷物が国の重要恒産費と認められ少し料金が変わりましたのでまた作り直しました。

昭和8年に印刷工業組合が出来ました。業者が、非常に景気が悪いので、例えば組版などでも5号四六半裁がそれを作ったとき95銭、



大正 15 年には少し下がり昭和 3 年には 75 銭、昭和 6 年には 65 銭と 30 銭もの開きがあり、これほど景気が悪かったため何とかしなくてはいけない、と工業組合を作りました。

昭和 6 年以来初めて全国の組合の方が印刷工業組合を作ることになりました。工業組合を作ると、料金の協定も統制規程も出来ます。ところが工業組合を作ることになって同意書を集めると 70 数軒あったのが、いざ創立総会となると 45 軒きり集まりません。やはり統制を受けたりして抑えられてはかなわない、という考えがあったようです。

まもなく資材が上手く入手出来ず配給制度になりました。すると次々と加入してきまして 70 数軒になりました。

後に日本印刷文化協会が出来、それがだんだん発展して、皆さんの統制で今日に続いています。

